

Round 13

『夜の大捜査線』 (ノーマン・ジュイスン監督、1967)

遠くに離れてみて初めて、故郷が理解できる。町や家庭内の善悪は、外部の人の目を通して初めて気づく。奥さんにすべてを押しつけるおっさんや、子供に勉強を強要するママたちが、その罪深さにちっとも気づかないように、差別や搾取をしている人たちは、その非正義に自覚がないどころか、それが標準な日課。南部アメリカ社会の根深い人種差別に真正面から挑み、その核心をとらえたのは北のトロント出身のカナダ人監督ノーマン・ジュイスン。

名監督たちに共通するのは、脇役陣の演技の細かさだが『夜の大捜査線』は、その代表。全員がその蒸し暑い南部の田舎町の実際の住人に見える。流れない水は腐るように、町から出ずに、同じことのみを繰り返す人間特有の狂気を持ち、実に気味が悪い。登場人物の中でただひとり、聡明な目を持つのは、フィラデルフィアから来た黒人刑事のヴァージル・ティップス(シドニー・ポワチエ)。もうひとり、リー・グラントが演じた、賢いゆえに孤独な未亡人は市長に「この人(ティップス刑事)に事件を任せなきゃ、町のおまわりは、また無実の人ばかりを檻に放り込むわよ」と的確。赤狩りで不当に人生を狂わされた女優リー・グラントには、持ってこいのセリフ。淀み切った田舎町で一番無能なのは警察署。その職員の詳細は傑作『セルビコ』と並び映画史上ベスト。原作のジョン・ポールは実際にカリフォルニアで保安官助手をしていたから、内情をよく知ってる。

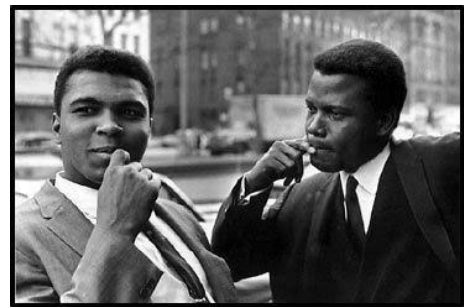
広大な綿花畑で、奴隷時代となら変わらず、子供たちを含む黒人をこき使う大地主は、黒人刑事のティップスが質問しただけで、いきなり平手打ち。間髪入れずにティップスは平手打ちを返す。すぐ横にいた地元の警察署長は度肝を抜かれる。大地主は頭から火を噴きながら「お前を撃ち殺させても当然だ」と本性丸出しのシーンがある。

映画の公開の3ヶ月前に世界ヘビー級チャンピオンのモハメド・アリがベトナム徴兵拒否。「タイトル奪奪、ライセンス停止、莫大な罰金、5年間の服役」と政府からのあらゆる脅迫にビクとせず「ろくに人権もなく、

犬のように扱われても、国民としてのあらゆる義務は果たしている。なのに今度は白人たちの帝国主義の片棒を担いで、1万マイルも飛んでって爆弾を落として、貧しい人たちの家を焼き払い、農民を撃ち殺せだ？俺のことをクロンボ呼ばわりしたベトナム人はいない。恨みはないし、絶対に人殺しはしない」という若きチャンピオン。世界に視野を広げていた彼の聡明な言葉が、体制側に洗脳された大多数の目を覚まさせていた時に『夜の大捜査線』が登場。ティップスを演じたシドニー・ポワチエとモハメド・アリの交流も始まった。他の国だったら公開禁止になる映画が即座にアカデミー作品賞に輝くところがいい。強大な悪と純真な善が同居するアメリカでなんと5つのオスカーを得て、公民権運動、反戦運動に拍車を。製作から50年経っているが、今でもジャパンでは国内の差別視の映画は作らないし、仮に作られても公開は絶望的だし、年間最優秀作品賞には輝かない。発展するのは、タブーを破る社会のみ。

キャスト、スタッフには役者が揃っていた。田舎にこもる署長を演じオスカー受賞のロッド・スタイガーは「俺のうちには誰も来やしない」と学も友もない孤独を語るシーンが一番好きだと話していた。彼の訃報を聞いたのは2002年7月、私がシチリア島にいた時だった。編集賞獲得のハル・アシュビーは、ベトナム戦争の非人間性を描いた『帰郷』等でのちに名監督に。脚色賞のスターリング・シリファントは、この作品からブレイクし、クインシー・ジョーンズによる主題歌を歌ったのはレイ・チャールズ。撮影は名士ハスケル・ウェクスラー。2004年、ハスケルの息子マークと渋谷の街で一日過ごした時はお父さんのことは一切質問しなかった。何百回も同じことを人に訊かれているだろうから。彼は、手のひらサイズのカメラで快晴の東京の街を撮るのを楽しんでいた。お父さんは去年2015年クリスマス直後に93才で亡くなった。

ノーマン監督は『ソルジャー・ストーリー』、『ジャスティス』、無実で20年服役した実在のボクサーを描く『ザ・ハリケーン』で差別や正義を追い、『ジーザスクライスト・スーパースター』『屋根の上のバイオリン弾き』『月の輝く夜に』等で壮大な力量を発揮。



▲モハメド・アリ(左)とシドニー・ポワチエ

『夜の大捜査線』は、米南部だけの問題じゃない。繰り返される日常の中、いつの間にか偏見心に汚れていく万人への警告。国境、国籍、人種、難民を考えた時に個々の内心に宿る偏見は、今もミシシッピーの歪んだ熱気を帯びている。

(Lucky Day)

*文中「アフリカ系アメリカ人」と表記すべきところを1967年公開当時の「黒人」としてします

Round 14

『男はつらいよ』 (山田洋次監督、1969-1998)

お金だけがすべてのタコ社長と働き詰めの工具は『男はつらいよ』シリーズに毎回登場する。彼らに向かって「労働者諸君！毎日、ご苦労さん！」と、たまに柴又に帰って来る寅さん。

団子屋「とらや」の裏庭に立つ、今にも壊れそうな共同社員寮に暮らす彼らとタコ社長を背景にしているところが「世界一の長寿シリーズ映画」としてギネスブックに載る山田洋次監督の「勝因」。

客が入ってくる表は小綺麗にしているが、裏では、おじちゃんとおばちゃんが粉まみれ。工場ではみんな油まみれ。経営のトップのはずのタコ社長も常に支払いに迫られる。日々、一生懸命働くが生活は苦しい庶民。対照的に呑気(のんき)に暮らしているのは警官、役人たち。賢い人が真実を暴く時は「現実も笑い飛ばす」こと。さもないと支配者階級にとちめられる。充分巻き上げた豊富な税金で暮らす人々も、その皮肉に気づかずに一緒に笑っているところが監督の腕前。家庭を無視する無責任な父親たち。裏社会の人間が会おうのは、お寺や神社という設定が宗教の闇を示唆しているが、それに気づく観客は少ない。教師やガリ勉学生たちの社会常識のなさを知り尽くす東大卒の山田さんは、寅さんに「お前、さしずめインテリだな！」と言わせ、表面上は彼らを褒めているようで実は「この役立たず」と、人々の本音を。こうした人種の前で、寅さんの経験深さ、あったかさがさらに際立つ。自国のことは国を離れないと何もわからないものだが、登場人物に社会を反映させた山田監督は満州生まれ。

マーク・トウェインがガマンならなかった『トム・ソーヤーの冒険』の教師同様、頭に来て「よーし、学校へ行ってくる」と寅さん。「学校へ行っとうどうするの？」と、妹のさくら。「校長にかけ合うのよ！そんな教師は、とつとつ、とつ変えろ！ってね。そんなバカを教師にしているから、この国は、ダメになったんだってな！」と寅さんに言わせた監督は、計4本の『学校』シリーズで真の人間教育をうったえた。

親離れしない大人に「親の言いなりになってる奴なんか男じゃない」と、ケンカする夫婦には「もっと優しい言葉で話せないのか」と、罵り合いの無意味を。旅を続け成長する寅さんとは対称的に、同じ町に暮らし墮落し続ける市民が夢なき者の象徴。

1969年から1998年までの48作に見る社会のほんの一例は…

- 「奥さんに逃げられた退屈なマザコン男」
- 「子供の世話をし過ぎて子供を破壊する母親」
- 「酒とパチンコ」
- 「パパが家出した冷たい家庭」
- 「遠距離通勤で家族が崩壊」
- 「世間体ばかり気にするママ」
- 「買物ばっかりのおばさん」
- 「子供を思い通りにして、不幸にする両親」
- 「酒とタバコの教授」
- 「旅館の二代目跡取りは絶望的」
- 「パー通いのサラリーマン」
- 「アジア系労働者を見下す経営者」
- 「あいさつしない教員」
- 「児童をいじめる教師」
- 「税金無駄遣いの能無し役人たち」
- 「口だけの町長」
- 「夫婦は冷め切り、親子は何十年も絶縁中」
- 「女性は騙されて借金地獄」
- 「結婚相手を永遠に待ち続ける床屋の女主人」
- 「町に染みつき、同窓会しかない中年たち」
- 「テレビやゲームばかりの典型的バカ息子」
- 「社員にこき使われる学生アルバイト」
- 「家庭崩壊の家出少女」
- 「親がぐうたらで定時制に通う少女」
- 「学生をバカにするサラリーマン」… 山田監督は、これらを叩くのではなく、寅さんの持つ善を広めることに集中している部分がまた賢い。根っから腐った心には薬はないから。2003年に出会った物静かな山田さんからは、心に秘める社会への危機感がピリピリと伝わってきた。さくら役の倍賞千恵子さん、はまり役リリーの浅丘ルリ子さんからも役柄を通じて人間を掘り下げた人だけが持つ深みが溢れていた。



◎松竹

シリーズ進行時代に、崩壊家庭やビデオゲームで生まれ育った人たちが今、子育て中。子供を静かにさせるのに最適なスマートフォンやiPadのおかげで「黙らせ作戦」は成功中。『男はつらいよ』シリーズはヒットしたが、世界の未来は『もつとつらいよ』ハートのみで行動する寅さんがいつもひとり旅を続けたように、真に学ぶ大人は常に少数派。多数派は数にものを言わせ自己弁護。

「体制、多数派に属したらイカン」と世界を旅したマーク・トウェインのように、自分を信じる寅さんは、人を助けることに全力を尽くした。

シリーズ中、大変な思いをしてでも自分の小さな町を飛び出した人たちがほんとの幸せをつかむ。

(Lucky Day)